

「クリタケ(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

クリタケ(栗茸)は、名の通りクリの木に発生するキノコ的一种だ。通常はすでに根が死んでいる切り株に発生することが多い。しかし、今回は一部が生きている切り株に発生した。



クリタケは、新しい芽(幹)が生えた反対側の根元に発生していた。恐らく切り株のこちら側は、すでに朽ちかけていたのだろう。



私は切り株から引っっこ抜いて裏返してみた。キノコ(子実体)根元が一つにまとまっている。これは「束生」(そくせい)といって、クリタケの特徴の一つである。クリタケは食用になるが、よく似た「ニガクリタケ」は猛毒菌で、食すると死ぬ。ニガクリタケの特徴は、胞子が黒いので、傘の裏側が黒っぽく見えることだ。また名称の通り「苦い」ということも見分ける

上で大きな特徴だ。ニガクリタケの場合、傘の一部を噛んでみると非常に苦い。噛んだだけで中毒を起こすことはなく、飲み込まない限り安全である。今回発見したものは、いずれも安全な「クリタケ」だった。



山荘の裏庭を歩くと、古いクリの木の切り株にも、クリタケが大発生していた。味噌汁の具にするとおいしいキノコなので、採っておけばよかった。



それにしても、山荘の庭が荒れている。これはイノシシの大群の仕業だ。ミズズやキノコ(地中の幼菌)を掘り起こしたあとである。表庭も裏庭もまるで早春の畑のように耕されている。しばらく留守にしていたので、絶好の「餌場」になってしまったようだ。